

学校・地域連携評定尺度の開発と地域住民による評定

The School-Community Partnership Scale for Residents

小 泉 令 三

(Reizo Koizumi)

学校教育講座

(1999年9月10日受理)

A new scale to measure perceived school-community partnership was constructed and its validity and reliability was confirmed. A total of 339 people who live mainly in towns and cities in Kyushu area responded to the scale. Elementary school was evaluated higher than junior high school in their cooperation with the communities. Residents with their own needs and intrinsic motivation were suggested to show higher evaluation scores. These results were discussed in terms of the school's role in and contribution to its community.

子どもを取りまく環境には、大きく学校、家庭、地域社会がある。この中で、1番規模が大きく、それでいて存在を実感しにくいのが地域社会である。子どもの成長・発達におよぼす地域社会の影響力については、地域社会が学校と家庭を包含し、かつ行動様式や社会規範を伝達するという意味で、重要な意味をもつ。Bronfenbrennerの生態学的心理学(Bronfenbrenner, 1979)がいうところの入れ子型構造で言えば、1番内側で人間と直接的な関わりをもつ環境が家庭や学校(学級)であり、その外にあってこれらを含むより大きな環境が地域社会となる。このように地域社会は子どもの教育にとって重要である。

現在、地域社会のもつ教育力が低下したと言われ、かつ学校側は社会の中での役割を模索しつつ、地域社会の協力を得て学校教育を進めざるを得ない状況にある。こうした中で、学校と地域社会の連携の必要性が叫ばれ、1996年の中央教育審議会答申も、学校と地域社会の連携について家庭との関係を含めて言及している。

従来より、学校が地域社会と連携するために具体的な方策がいろいろ工夫されている(例:今野, 1998)。その連携度を表す指標としては、まず学校施設の開放が第一歩ということで、施設開放の程度や利用率などが調査されてきた(文部省, 1996)。一方、学校が“心のふるさと”として日本人の心の中に位置づけられることが多いと言われることからわかるように、心理的な意味での緊密さが、学校と地域社会の連携を考える際に欠かすことの

できない側面である。しかし、残念ながらこれまでのところ、住民が認知する学校と地域社会の連携の程度を測定できる尺度は見あたらない。

こうしたことから、本研究の第1の目的は、学校と地域社会の連携がどのように認知されているかを評定する尺度(「学校・地域連携評定尺度」とする)の開発にある。第2の目的は、それを用いた地域住民による評定をもとに、評定に関連する要因や住民の具体的な行動を探索的に検討することである。なお、学校と地域社会の連携は学際的な内容であり、多方面からの取り組みが可能である。ここでは、これが子どもを取りまく環境に関わる問題であるとの認識から、環境を主たる対象とする環境心理学およびコミュニティ心理学の視点をを用いて取り組むこととした。

方 法

学校・地域連携評定尺度の構成

環境を構成する次元として、物理的側面、対人的側面、社会・文化的側面の3側面(山本・ワップナー, 1992)を設定した。尺度項目は、地域住民が評定不可能な内容(例:運営や経費に関する事項など)を避けるために、できるだけ地域住民がイメージしやすく、理解が容易な内容となるようにした。具体的には、看護婦としてフルタイムで勤務している女性69名に、「あなたが現在住んでいる地区の小中学校について、“どんな学校ですか?”と聞かれたときに、どのように答えます

表 1 学校・地域連携評定尺度の因子分析結果

因子/項目	I	II	III	IV	平均	SD
第I因子 地域との人的交流 ($\alpha = .82$)						
24 歴史の長短に関係なく、あなたの地域の学校は、地域に根づいた学校だという印象がありますか	61	02	-02	09	2.73	.97
23 学校の先生や職員は、受け付けや電話で地域の人たちに、気持ちの良い対応をしますか	61	08	03	-08	2.73	.94
14 学校の先生と保護者は、PTA 活動などで連携がとれていますか	55	18	01	-09	2.78	.83
29 授業参観や行事で、保護者や地域の人が学校を訪問する機会がありますか	53	-06	03	-01	3.29	.82
21 PTA による行事や活動に、地域の人たちは協力していますか	53	02	07	04	2.86	.90
17 学校の先生と保護者は、子どもの校外指導（交通安全指導や巡回など）で協力していますか	51	06	-12	15	2.85	.94
20 地域の人が学校を訪問したときに、子どもはあいさつをしてくれますか	.43	24	-12	09	2.71	1.00
19 あなたの学校の校舎や花壇、樹木はきれいに整備されていますか	43	04	04	-06	3.22	.85
28 保護者や地域の人が、草取りなどで学校の敷地や校庭の整備をすることがありますか	40	15	-03	-04	2.40	1.20
27 学校では、地域の人を招いて、昔のようすや遊び、地域の歴史などが学習されていますか	39	-04	-06	28	2.27	1.00
26 学校の先生や子どものことが、地域で話題になりますか	39	-15	04	22	2.36	.89
15 学校は、学校のようすを学校便りや通信によって地域の人たちに伝えていますか	37	-03	10	13	2.40	1.00
第II因子 地域社会への参加 ($\alpha = .76$)						
9 学校は、地域の福祉活動（ボランティア活動や清掃）に取り組んでいますか	18	69	-06	05	2.12	1.01
3 地域の行事に、学校から子どもが参加することがあります（清掃ボランティア活動への学校からの参加や、行事への吹奏楽部の協力など）	07	68	-04	-04	2.39	1.11
6 祭りや共同募金のような地域の社会的活動に、学校は取り組んでいますか	12	64	03	-03	2.35	1.05
2 学校の先生は、地域の行事（祭りや清掃活動など）に参加しますか	20	50	01	-09	2.06	1.08
5 学校のクラブ活動（授業で全員が参加するもの・手話、詩吟、スポーツなど）の指導に、地域の人が参加していますか	-10	35	03	26	2.04	1.19
第III因子 学校施設の開放 ($\alpha = .73$)						
1 地域の行事（町内運動会、祭りなど）のために、学校の施設（校舎、体育館、運動場）が使用されていますか	06	-05	59	-19	3.04	1.07
13 地域の団体（保育園、幼稚園、社会福祉団体など）のために、学校の施設（校舎、体育館、運動場）が使用されることがありますか	-23	17	56	05	2.06	1.09
16 休みの日などには、校庭が一般に開放されていますか	22	-33	54	12	2.63	1.33
8 地域の人が、気軽に学校を訪問したり、校庭を散歩できるような雰囲気がありますか	18	-03	51	12	2.35	1.05
4 地域の運動サークル活動（野球、バレーなど）のために学校の施設（校舎、体育館、運動場）が使用されていますか	35	-01	45	-31	3.23	.91
7 地域の文化サークル活動（合唱、俳句、料理教室など）のために学校の施設（校舎、体育館、運動場）が使用されていますか	-19	31	43	14	1.69	1.13
10 婦人会や老人会の活動で、学校の施設（校舎、体育館、運動場）が使用されていますか	-11	20	42	17	1.89	1.10
第IV因子 地域社会の受容 ($\alpha = .62$)						
30 地域に貢献した人や地域で著名な人が学校に招かれて、子どもや先生に話をすることがありますか	09	-10	-02	67	1.95	.96
11 地域のいろいろな職業の人が学校に招かれて、職業や進路についての話をすることがありますか	-14	19	11	50	1.37	1.06
18 学校では、地域の文化的行事（伝統行事など）や歴史について、子どもが関心をもつような学習がされていますか	27	06	-12	44	2.18	.85
25 学校の施設（校舎、体育館、運動場）は、初めての人でもわかるように、案内図や掲示などの工夫がされていますか	20	01	-06	38	1.92	1.10
(除外項目)						
12 学校には、地域の人たちも参加できる行事がありますか	26	14	23	08	2.21	1.01
22 学校の施設（入り口、トイレの位置、下足箱、電源、照明装置など）は、地域の人が利用しやすい構造や配置になっていますか	31	08	11	09	2.13	1.00
固有意	5.49	4.46	3.34	3.73		
因子相関行列	1.00	.47	.37	.43		
		1.00	.37	.51		
			1.00	.37		

(注) 因子負荷量の少数点は省略

か?」という一般的な問いかけをして、小中学校別に自由記述で回答を求めた。フルタイムで就業している女性は、フルタイムでは就業していない主婦、すなわち学校に行く機会が多くしたがって学校との関わりが1番強いと考えられる人たちと、逆に学校との関わりが1番弱いと考えられる就業している男性のちょうど中間に位置している。そのため、学校の平均的なイメージを抽出できると考えられる。得られた回答の中で、断片的であっても学校と地域社会との連携に関連するものを抽出した。それらを参考にして、環境の3次元の各々に10項目ずつ、合計30項目を設定した。物理的側面は項目1, 4, 7, 10, 13, 16, 19, 22, 25, 28, 対人的側面は項目2, 5, 8, 11, 14, 17, 20, 23, 26, 29, 社会・文化的側面は項目3, 6, 9, 12, 15, 18, 21, 24, 27, 30である(表1参照)。

尺度では、回答者が住んでいる地域の公立小中学校の各々について、「よく使用されている」(5点)、「ときどき使用されている」(4点)、「どちらともいえない(分からない)」(3点)、「あまり使用されていない」(2点)、「まったく使用されていない」(1点)の5件法で回答を求めた。なお、「使用」の言葉は項目内容によって、「参加」「ある」「取り組む」などに適宜、変更した。

調査対象者と手続

福岡教育大学学部生(約190名)*の家族と知人に、学生本人を通して一人当たり2名程度ずつ、個別に無記名で回答を依頼した。得られた372名の回答の中で、中学校についての回答が無記入であるなど回答に不備のあるものを除いた339名(男145名, 女194名)が集計の対象者であった。表2はその年齢層・性別ごとに人数を示したものである。なお、学部学生の出身地は、福岡県を中心に大部分が九州地区内に広くちらばっている。したがって、調査対象者も特定の地域や校区に片

寄ったものではなく、九州地区の広範囲の地域に在住していると考えられる。

調査時期と方法

1998年12月から1999年6月にかけて実施した。

調査内容

学校・地域連携評定尺度の他に、年齢(10歳区切り)、性別、居住地の分類(農漁業, 商業, 工業, 住宅地, その他)、文化・運動サークル活動で学校施設を使用する場合の利用手続を知っているかどうか、その利用手続きでの改良すべき点(自由記述)、現在あるいは過去にその学校に通ったことのある子どもの数、過去1年間の学校訪問回数、そのときの行事(自由記述)を尋ねた。

結 果

因子構造の分析

尺度の構造を明らかにし、情報を集約する目的で、小学校への回答をもとに因子分析(主因子法, プロマックス回転)を行なった。固有値の変動状況(7.42, 2.05, 1.84, 1.44, 1.30, 1.05, .99, .95)を考慮して、3因子解から6因子解を検討した。その結果、因子としてのまとまり、採用できる項目総数、解釈可能性などから、4因子解が妥当であると考へた。因子負荷量が単一の因子に.35以上あることを条件に項目を整理したものが、表1である。項目内容から、それぞれ「地域との人的交流」因子、「地位社会への参加」因子、「学校施設の開放」因子、「地域社会の受容」因子と命名した。項目ごとの平均値と標準偏差、そして尺度ごとの α 係数(信頼性係数)も表1にまとめた。各調査対象者について、因子ごとに1項目あたりの平均得点を算出し、評定点(範囲:1.00-4.00)とした。

表2 調査対象者の年齢層と性別

年 齢	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代以上
男(人)	3	7	8	75	44	7	1
女(人)	2	10	25	113	40	0	4
計(%)	1.5	5.0	9.7	55.5	24.8	2.1	1.5

* 本研究のデータの一部には、筆者が指導した1998年度心理学特殊実験(受講者:原潤一郎, 田中亜季, 中武由記, 野田扶実子)のデータが含まれている。

小中学校間の評定点の違い

小中学校の校種ごとに、各評定点の平均値と標準偏差を因子別に整理したものが表3である。因子ごとに対応のあるt検定を行ったところ、いずれの因子でも有意な差が認められ、小学校が中学校よりも高い評定点となっていた(図1)。

評定点と関連のある調査対象者の特徴

評定点が調査対象者のどのような特徴と関連があるのかを検討するために、数量化理論I類による分析を行なった。小中学校別に、4因子の評定点の合計(範囲:4.00-16.00)を基準変数(被説明変数)とし、説明変数は性別(2カテゴリ)、居住地(5)、利用手続の知識の有無(2)、小学校への通学生の有無(2)、中学校への通学生の

有無(2)、小学校訪問の有無(2)、中学校訪問の有無(2)の7つであった。なお、説明変数の中の後半4つの変数については、もとの変数をそれぞれ「ある」「なし」に再カテゴリ化したものである。参考までに、もとの4変数の平均と標準偏差などを表4に示した。

表5は、各カテゴリの人数、平均値、数量化理論の分析結果、そして説明変数ごとのカテゴリ数に由来する自由度を考慮した分散分析のF値(参照:竹内・高橋・大橋・芳賀, 1989)をまとめたものである。小中学校のどちらも重相関係数、そして居住地(「工業」が高い)、利用手続の知識の有無(「知っている」が高い)の偏相関係数が有意であった。さらに小学校では、性別(「女」が高い)の偏相関係数も有意であった。

表3 校種・因子ごとの平均評定点と標準偏差および検定結果

	地域との人的交流	地域社会への参加	学校施設の開放	地域社会の受容
小学校	3.72(.55)	3.19(.78)	3.37(.69)	2.85(.68)
中学校	3.40(.56)	2.99(.72)	2.79(.71)	2.77(.66)
t(df=338)	14.47***	7.44***	16.75***	3.80***

***p<.001

表4 通学生と学校訪問回数に関する集計結果

	平均値	標準偏差	範囲	最頻値
小学通学生	1.59	1.17	0-8	2
中学通学生	1.51	1.15	0-8	2
小学校訪問	5.05	15.69	0-200	0
中学校訪問	4.13	14.08	0-200	0

(注) 小(中)学通学生=現在あるいは過去にその小(中)学校に通ったことのある子どもの数

小(中)学校訪問=過去1年間の小(中)学校訪問回数

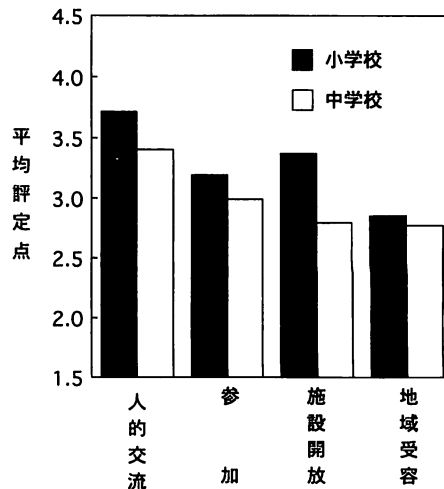


図1 校種・因子ごとの平均評定点

人的交流=地域との人的交流
 参加=地域社会への参加
 施設開放=学校施設の開放
 地域受容=地域社会の受容

表5 学校・地域連携評定尺度の平均値と数量化理論第I類の分析結果

	人	小学校の合計評定点			中学校の合計評定点		
		平均値	カテゴリー 数量	偏相関係数 (F 値)	平均値	カテゴリー 数量	偏相関係数 (F 値)
性別				.119			.087
男	144	12.80	-274	(4.64*) _a	11.66	-207	(2.47) _a
女	188	13.40	.210		12.17	.158	
居住地				.176			.185
農漁業	63	13.48	.212	(2.56*) _b	12.34	.309	(2.84*) _b
商業	18	13.69	.503		12.04	-.034	
工業	5	15.36	2.218		14.61	2.512	
住宅地	226	13.00	-.097		11.82	-.079	
その他	20	12.58	-.574		11.35	-.682	
利用手続				.230			.223
知っている	91	13.99	.761	(17.71***) _a	12.75	.758	(15.07***) _a
知らない	241	12.82	-.287		11.64	-.286	
小学通学生				.026			.062
いる	253	13.17	.036	(.21) _a	11.95	.091	(.83) _a
いない	79	13.06	-.116		11.93	-.290	
中学通学生				.065			.119
いる	251	13.06	-.096	(1.30) _a	11.85	-.183	(4.18*) _a
いない	81	13.40	.297		12.24	.566	
小学校訪問				.067			.031
あり	166	13.33	.150	(1.42) _a	12.01	.071	(.21) _a
なし	166	12.95	-.150		11.88	-.071	
中学校訪問				.026			.074
あり	164	13.14	-.061	(.22) _a	12.03	.175	(1.15) _a
なし	168	13.14	.059		11.86	-.171	
重相関係数				.344			.316
				(4.31***) _c			(3.85***) _c

(注) 利用手続＝文化・運動サークル活動で学校施設を使用する場合の利用手続
 小(中)学通学生＝現在あるいは過去にその小(中)学校に通ったことのある子ども
 小(中)学校訪問＝過去1年間の小(中)学校訪問回数

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$ a $df = 1/321$ b $df = 4/321$ c $df = 10/321$

表6 利用手続に関する改善希望点

- ・できるだけ簡単にしてほしい(2)
- ・教頭のところに行かなくてよいように、用紙は事務室に置いてほしい
- ・24時間受け付けてほしい(2)
- ・予約、支払い、鍵の受け渡しが別の場所で、時間と労力がある。学校かその近くでやってほしい(2)
- ・行政を通さなくてよいようにしてほしい(2)
- ・第2・4土曜日の使用時間の最終を、2時から5時にしてほしい。ガードマンに追い出された。
- ・夜間照明がほしい
- ・継続的なものと、単発的なものが申請先が異なる。学校に一本化してほしい。
- ・窓口での説明をしっかりとしてほしい。預かった鍵で施設が開かなかったり、預かった鍵で別の部屋を開け、その中に鍵がある場合があった。
- ・教師に休日勤務をさせることがあり、配慮してほしい
- ・スポーツクラブなどの登録団体優先で、個人では難しい
- ・地域の回覧板で連絡が来るが、ほとんど期限切れ。余裕をもって回してほしい。

()内は、記述のあった人数

利用手続改善点と学校訪問行事

自由記述で求めた利用手続に関する改善希望点と、過去1年間の学校訪問の行事をまとめたものが表6と表7である。利用手続に関しては、現在は複数の場所に出向かなければならず、学校に手続きを1本化することを希望するものが多かった。学校訪問の行事としては、当然のことながら学校行事に関するものが多く、小中学校ともに運動会・体育祭、授業参観、PTA 関連行事が上位である。地域や社会体育関連の行事もあげられて

おり、その中では施設開放による行事やスポーツサークルの練習が目立つ。

考 察

本研究の第1の目的は、学校・地域連携評定尺度の開発であった。まず、因子分析の結果から、当初設定していた物理的側面、对人的側面、社会・文化的側面の3つの側面と同じではないが、かなり類似した結果が得られた。項目を吟味してみる

表7 過去1年間の学校訪問の行事

小学校		
[学校教育関連]	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個人懇談会 (4) ・ 部・クラブ活動 (保護者会など) (4) ・ 音楽会 (音楽鑑賞会) (4) ・ もちつき大会 (4) ・ 家庭教育学級 (3) ・ 廃品回収 (2) ・ 給食試食会 (2) ・ 伝承遊び (ボランティアとして) (2) ・ 修学旅行説明会 (2) ・ 視察 (パソコン教室) (2) ・ 夏休みキャンプ ・ タオル・石鹸配布 (老人会より) ・ 読み聞かせ ・ 焼き芋大会 ・ 幼稚園の遊戯会 	[地域・社会教育関連]
<ul style="list-style-type: none"> ・ 運動会 (114) ・ 授業参観(クラス行事) (82) ・ PTA 諸行事・会議 (37) ・ 親子での行事 (19) ・ 学習発表会 (19) ・ 卒業式 (17) ・ 奉仕作業 (草取り) (16) ・ バザー (12) ・ 入学式 (11) ・ 学級懇談会・茶話会 (11) ・ マラソン大会応援 (10) ・ 文化祭 (作品展示会) (8) ・ スポーツ大会 (リレー, 水泳, 陸上, 相撲) (7) ・ プール監視 (6) ・ 研究公開・発表会 (5) ・ PTA 講演会 (4) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地区 (町内・校区) 運動会 (卓球大会, レク) (29) ・ 選挙 (29) ・ 社会体育 (バレー, バスケット, ミニバレー, ソフト) (14) ・ 祭り・盆踊り・夏祭り (8) ・ 地域文化祭 (9) ・ スポーツ少年団指導 (9) ・ ジョギング・散歩 (2) ・ 子供会活動 (2) ・ 文化サークル活動 (2) ・ どんと焼き (2) ・ 地区長話し合い ・ 社会体育応援 ・ 子供会スポーツ大会 ・ スポーツ少年団見回り 	
中学校		
[学校教育関連]	<ul style="list-style-type: none"> ・ 弁論大会 (3) ・ 地域集会 (3) ・ 音楽祭 (音楽発表会) (2) ・ 校門あいさつ運動 ・ 学習発表会 ・ 記念行事 (50周年) ・ 教育相談 ・ クラスマッチ ・ マラソン大会 ・ 親子交流会 ・ おやじの会 ・ PTA 合唱練習 ・ PTA 夜間補習 ・ プール当番 ・ 先生の送別会 ・ 修学旅行説明会 ・ タオル・石鹸配布 (老人会より) 	[地域・社会教育関連]
<ul style="list-style-type: none"> ・ 体育祭 (105) ・ 授業参観 (82) ・ PTA 行事・諸会議 (43) ・ 学校文化祭・コンサート (32) ・ 個人懇談・進路相談 (31) ・ 卒業式 (27) ・ 入学式 (21) ・ 部活動 (保護者会, 役員決め, 試合, 合宿, 説明会, 応援, 親子野球大会) (19) ・ 奉仕作業 (草取り, 愛校作業) (14) ・ バザー (13) ・ 学級懇談会 (11) ・ 進路説明会 (11) ・ 合唱コンクール (6) ・ 講演会 (4) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 体育館落成式 ・ スポーツ (ソフト, ミニゴルフ, 球技大会, バレー, マスゲーム, レクリエーション) (13) ・ 町体育祭・校区運動会 (5) ・ 選挙 (5) ・ 盆踊り ・ 観月会 ・ 家庭学級 ・ ジョギング ・ ママさんコーラス ・ パソコンクラブ (公民館主催) ・ 散歩 ・ 野球試合 (子ども育成会) 	

() 内の数字は記述のあった人数

と、地域との人的交流因子は対人的側面の項目(14, 17, 20, 23, 26, 29)が多い。地域社会への参加因子は、社会・文化的側面の項目(3, 6, 9)が因子負荷量で上位を占めていた。学校施設の開放因子は、項目8を除いてすべて物理的側面の項目である。以上の3因子は、予め設定した3側面の構造にかなり一致している。4番目の地域社会の受容因子は、3つの側面が混在する内容となっていた。以上、当初の構造とは多少異なる点もあるが、大枠において、構成概念妥当性が確認されたと考えられる。また、内部一貫性を表す α 係数はどの因子も十分なレベルにあり、信頼性も満足できる水準に達していた。

学校と地域社会の連携の程度を表す指標は、数多く考えられる。例えば、学校を訪問したり利用した地域住民の数、両者が協力した行事の数、学校が利用している地域内の施設数などが上げられる。今回開発した尺度は、これらの指標とは別に、意識レベルで、学校と地域社会の連携がどのように評価されているかを測定するものである。両者の連携を進める中で、本尺度評定点の時系列的変化を測定することにより、地域住民の評定の変化をとらえることができると考えられる。

本研究の第2の目的は、地域住民の評定に関連する要因や住民の具体的な行動を検討することであった。小中学校の評定点の比較(表3, 図1)から、どの因子でも小学校の評定点が中学校よりも高いことが明らかになった。これは、小学校の方が校区が狭く、地域に密着しやすい条件にあるためと考えられる。ただし、4つの因子の評定点の平均が小学校で3.28, 中学校が2.99(範囲: 1.00~5.00)であり、全体的に評定点はあまり高くない。学校と地域社会の連携の推進は、まさにこれからの課題である。

数量化理論I類を用いた分析から、小中学校とも、利用手続きを知っている人が評定点が高いという結果を得た。小中学校の在校生や卒業生がいるかどうかや、小中学校への訪問の有無は、評定点の高低と関連がなかった。ここで、評定点の合計だけではなく、小中学校合わせて8つの評定点のそれぞれについて、利用手続きを知っている人と知らない人を比較してみた。すると、利用手続きに直接的な関係がある学校施設の開放因子だけではなく、他の因子すべてにおいて小中学校ともに、利用手続きを知っている人の方が知らない人よりも、有意に評定点が高かった。学校施設の利用手続きを知っている人は、自らの必要性にもとづいて、主体的に学校と関わろうとする人である。

そういう人は、施設の開放だけでなく、他の面でも学校と地域社会との連携を相対的に高く評定していた。このことから、単に学校に通う(あるいは、通っていた)子どもがいたり、学校行事等のために学校を訪問するだけでは、学校と地域社会の連携を高く評価することはないということの意味している。実際、地域住民が学校を訪れる機会は多く、実に多くの種類の学校行事があげられている(表7参照)。しかし、地域に根ざした学校をめざすには、学校への協力を依頼したり、訪問を呼びかけたりするだけでは不十分なのである。学校が、地域住民にとって利用価値があり、主体的に関わろうとする対象として位置づけられるときに、両者の連携が積極的に認知されることを示唆している。これを学校側から見れば、1996年の生涯学習審議会答申にもあるが、地域コミュニティに貢献できる学校のあり方を追求する姿勢が必要である(小泉, 1999)ことを意味している。

なお、地域コミュニティへの学校の貢献は、施設の開放のみならず機能面での開放も含んでいる。地域住民が学校を訪問する機会としては社会教育の文化的行事もある(表7)が、大半は社会体育関係である。もっと多彩な利用や学校との連携の方法が模索されるべきではないだろうか。例えば、子育て相談や家庭教育センターとしての役割が提案されている(玉井, 1998)。これらは、コミュニティ心理学が力点を置くところの、地域に対するサービスプログラムそのものである(箕口, 1995)。学校がもつ教育機能をどのように地域に開放するのが、今後のポイントであると考えられる。

工業の地域の住民の評定点が高いという結果については、今回の回答者が5名と少なく、また具体的にどのような地域なのかという情報が得られなかったため、考察は難しい。可能性として考えられるのは、町工場がならんでいたり、古くからの工場地帯であって、学校の歴史が地域の発展や衰退と密接に関わっているような地域である。これについては、今後のさらなる検討が必要である。小学校については、性別の偏相関係数が有意であった。女が男より評定点が高いのは、種々の学校行事を中心に、学校との関わりが深いためと考えられる。

自由記述で求めた利用手続きについての改善希望点は、全体として手続きを簡単にしてほしい、あるいはより自由に使用できるようにしてほしいという要望にまとめることができる。特に、学校で手続きを一元化できないかという意見は重要である。学校施設の開放が進んでいても、管理の主

体が学校にない限り、その施設開放に学校が関与しているという意識は学校側に生じない。地域に根ざし、地域社会との連携を進めようとするのであれば、こうした点も今後の検討課題の一つと考えられる。

以上、本研究の結果をまとめると、(1)学校と地域社会の連携を評定する尺度を開発し、妥当性

と信頼性を検討した。(2)両者の連携の評定には、学校施設利用の手続きを知っているかどうかに関連しており、自らが必要性を感じ主体的に学校に関わることの重要性が推測された。今後は本尺度を用いて、地域社会に対する学校のはたらきかけが、地域住民の評定にどのように影響を及ぼすのかを検討していきたい。

引 用 文 献

- Bronfenbrenner, U. (1979) *The ecology of human development: Experiments by nature and design*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 小泉令三 (1999) コミュニティ心理学からみた学校と地域社会の連携 — 環境移行事態での適応援助を例として — 日本教育心理学会第41回総会発表論文集, 91
- 今野雅裕 (1998) 事例に学ぶ学校と地域のネットワーク ぎょうせい
- 箕口雅博 (1995) コミュニティ心理学的発想からみたサービスの提供 山本和郎・原裕視・箕口雅博・久田満 (編著) 臨床・コミュニティ心理学 ミネルヴァ書房
- 文部省 (1996) 体育・スポーツ施設現況調査
- 竹内啓・高橋行雄・大橋春雄・芳賀敏郎 (1989) SASによる実験データの解析 東京大学出版会
- 玉井康之 (1998) 学校を基礎とする地域づくり活動 山田定市 (監修) 大前哲彦・千葉悦子・鈴木俊正 (編著) 講座 主体形成の社会教育学3 地域住民とともに 北樹出版
- 山本多喜司・ワップナー・S (1992) 人生移行の発達心理学 北大路書房